

# 増毛山道 歴史ロマンの復元作業

## 空白地帯のルート探査へ

歴史の中に埋もれた産業遺産の増毛山道の復元作業に増毛町内や留萌市、石狩市、札幌市の有志で組織した増毛山道の会が取り組んでいる。復元作業は二十年度から本格的に始まった。同会では二十三年度には「別知〜岩区間の一般開放を目指したい。同時にデータの空白地帯となっている石狩管内幌地区までのルート探査を進める」と話しており、留萌、石狩管内をまたぐ山道復元にに向けて一歩前進する。さらに、二十二年十月までに別知から分岐地点を経由して岩尾地区までの約十六キロ区間が約六十年ぶりに再現された。多数の関係者が山道を歩き、貴重な意見を寄せた。会員たちは「今後の利用に弾みがつく」と期待を膨らませている。

増毛山道は、江戸時代の末期、この山道を復元しようとした。留萌振興局の支援を受け、この安政四年(一八五七年) ち上がったのが、伊達林右衛門から二十一年、二十二年と作業に当時のマシケとハマシケ 門氏の子孫で札幌市在住の伊達林右衛門に取り組んだ結果、ルート復元に当時の石狩市浜益地区) 場 達東さん、増毛町、留萌市、元では山道の増毛町側の入り口とされる別知から約十一キロの復元道路を会場に「増毛山道所を請け負っていた商人の伊達林右衛門氏が自費を投じて開削した。

山道は、水揚げしたニシン 運搬などに使われた。やん 衆をはじめ旅行者や住民が行き交い、宿泊や休憩用の駅通 建設、通信用の電柱整備、 一等水準点の設置など産業道 路として整備が進められた。 昭和二十年代になってニシン 漁が衰退すると山道の閉鎖、 増毛港と雄冬間の定期船運航 が開始され、その役目を終え るかのように通行人も減り、 山道はササやぶに埋もれた。

## 今秋に一般開放、観光に弾み

道の会に改めた。

ては旅人を狙った殺人事件も 発生している。その周辺には 毎春、黄色い花を咲かせるエ ンリュウキンカの群生地が 確認されている。

武好駅通は近代的な木造建 築物で、昭和十二年に増築が 行われた。しかし利用者が減 少したため同十六年に廃止さ れる。電報を運ぶ通送作業は

戦後も続けられたが、定期船 の就航とともに役目を終え、 長い年月の間に朽ち果ててし まった。確認された建設跡に は、なべや茶わん、利用者た ちが飲み干した無数のビール 瓶が掘った穴の中に無造作に 捨てられていた。

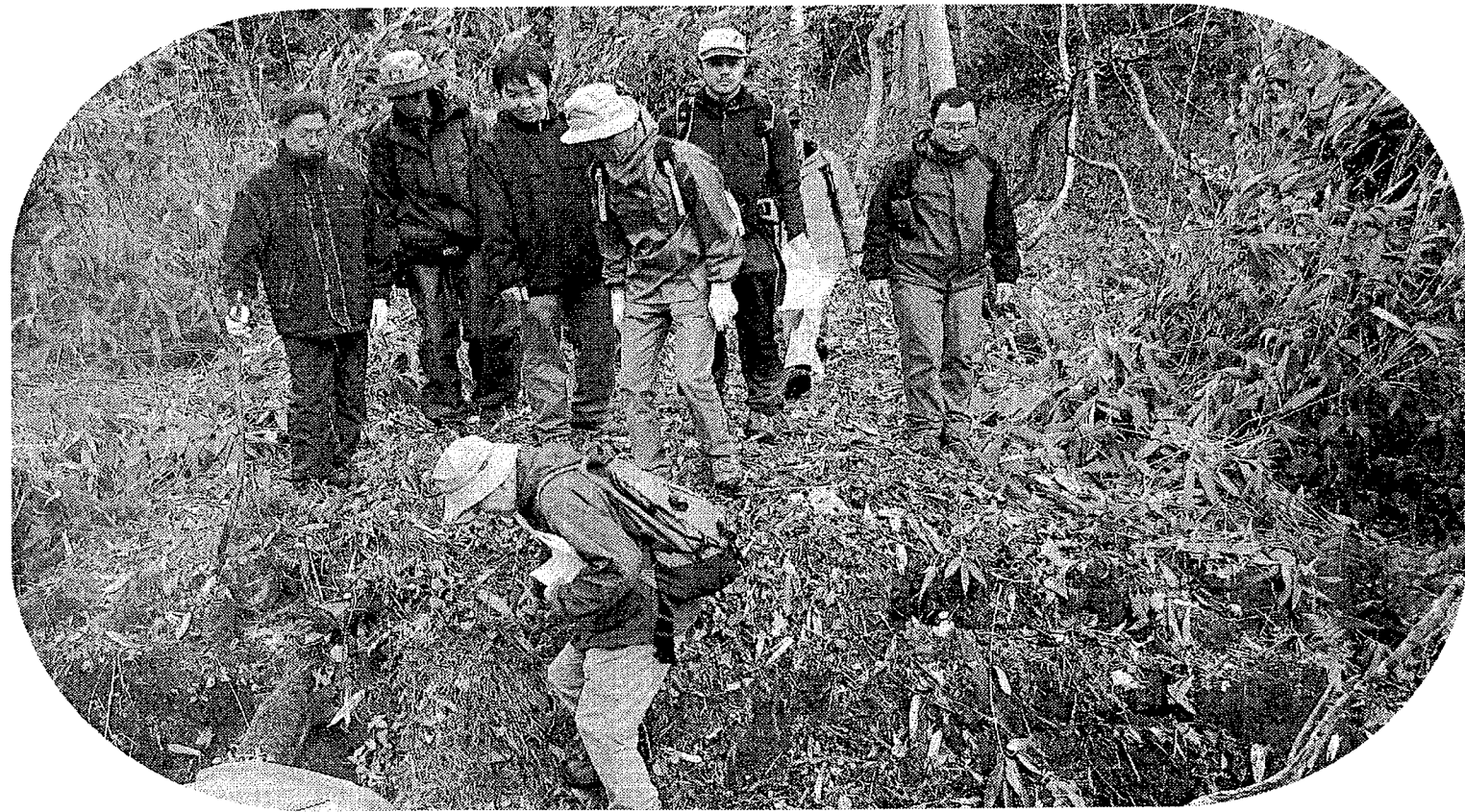
山道の会が昨年十月に、留 萌振興局、増毛町の職員や旅 行代理店関係者ら四十二人と 石狩市の市職員、体育協会員 五十八人をそれぞれ招き、 復元した別知から岩尾までの 復元道路を会場に「増毛山道 別知〜岩尾ルート利用検討 会」を開き、山道を歩いた感 想や今後の利用についてア ンケート調査を行った。

調査結果を見ると「新たな 観光資源になる増毛山道をア ピールするために復元した区 間だけでも一般に開放する、 道路の一部が作業道と入り

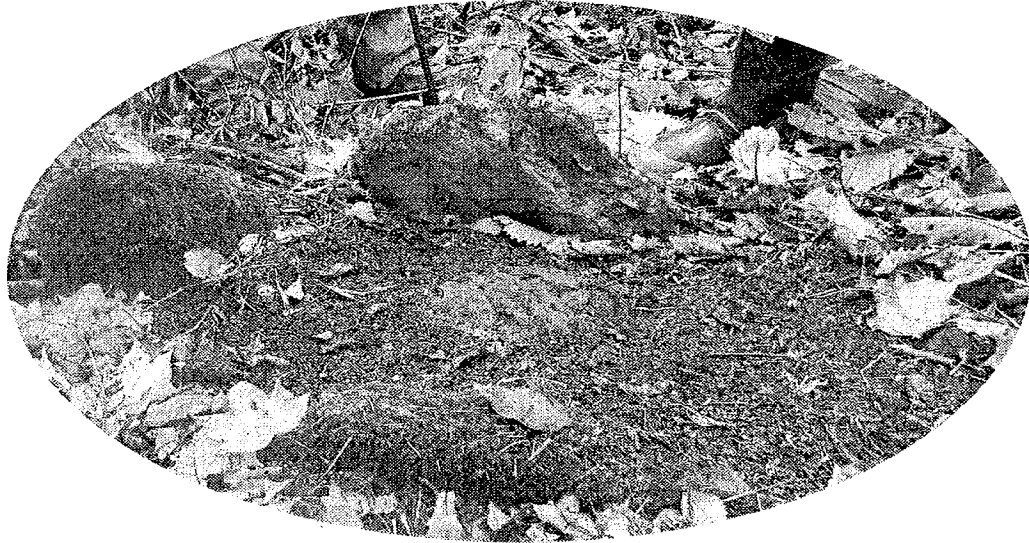
掘削作業は二十三年も継続 される。留萌管内側は約三 ころに二キロ間隔で七カ所所 設置した一等水準点が六カ所 で発見されるなど、留萌管内 のニシン漁の栄枯盛衰と近代 史を学ぶうえでも江戸末期か ら昭和初期に閉鎖されるまで の歴史的な遺産群は必見の価 値がある。



確認された旧武好駅通の建設跡



昨年10月に行われた増毛山道別知〜岩尾ルート利用検討会



明治時代に設置された一級水準点

同会の小杉忠利事務局長は 「復元した区間は一般の人が 立ち入らないようテープを張 っている。復元ルートの体験 希望があれば、会員が付き添 い案内することになっている。 復元ルートには林道や作 業道が複雑に入り組んでいる ので山菜採り愛好者が入り込 むと迷う心配がある。二十三 年度は案内板や標識の設置を 進め、秋までには一般開放が できるように整備したい」と 話している。

復元した山道の随所には、 朽ち果てた通信用の電信柱、 旧・新双方の武好駅通建設地 跡、国土地理院が明治四十年 と話している。

## 増毛町